

隣人愛で国際貢献を

AMDA活動報告

救える命があれば

どこへでも

□22□

大仲 良一



なぜ沖縄から支援

終戦後、一世を風靡した蘭田一夫の連続テレビドラマ「君の名は」の中で「忘却とは忘れ去ることなり」という名せりふがあった。時の流れとともに、「恐怖の忌まわしいこと」は忘れ去るのが悲しいか人間の性である。

阪神淡路大震災から既に十数年、インドネシア・スマトラ沖地震による大水害から二年を迎えようとしている。瞬時に二十数万人の命が失われ、いま五十万人が厳しい生活を余儀なくされている。

地球の上どこかで、毎日のように自然災害や人為的原因による被災者が絶えない。沖縄も決して例外ではあり得ない。

AMDA沖縄は国際緊急救援のために医師・看護師の派遣や、海外からの研修医の受け入れ、医療機械、医療品等の寄贈など十数年にわたるさまざまな活動をしてきた。民族、宗教、文化、国籍の壁を超え「相互扶助」という理念の下、支援活動を続けている。

なぜAMDAは国際支援を続けているのか。自らのことで精いっぱいなのに、他人の面倒まで見る必要があるのだろうか。

世界の国々の約80%は開発途上で、地球上には人類を苦しめる多くの病気があり、約四千二百万人がエイズウイルス(HIV)に感染、マフィアなどの伝染性の疾病が、医療の恩恵に浴さない開発途上国の人々を死の恐怖に直面させている。

安全な水が得られない人々が世界中に十億人もおり、開発途上国の疾病の80%が汚染された水に

よるもので、非衛生的な飲料水のため、毎日六千人の子どもたちが死んでいる現実を傍観することは人道上許されないことだ。多くの人々が先進国からの協力、援助を待ちわびている。

保健衛生の改善を阻害している大きな問題は、これらの国々の衛生知識の貧困によるもので、世界人口の三分の一に近い約二十億の人々は日常生活に必要な簡単な読み書きや計算能力が乏しいため、生活環境を改善する方法や能力に欠けているのであり、保健衛生向上のためAMDAは教育面にも力を注いでいる。

わが国は去る大戦で多くのものを失った。地上戦を体験した沖縄は、すべてが灰塵に帰した。国民は貧困を味わい、生きずべと自信をすっかり失った。日本は世界中の多くの国々から経済援助、国際機関からの資金供与、各国の民間団体からの物資や資金の提供などを受けて先進工業国へと発展し、現在の経済大国となった。

約八十年前に起こった関東大震災では、多くの国々から医薬品や食料などの援助物資が迅速に届

けられた。近年、紛争が続いている中近東の国々も、極東の島国で起こった大震災に深く思いを寄せ、支援を寄せた。

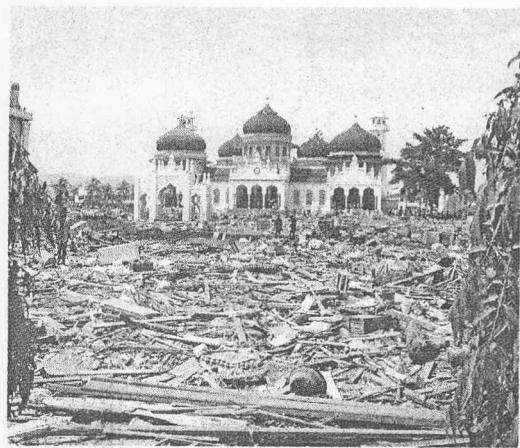
阪神淡路大震災でも、先進国はもとより、発展途上国の人々からも心温まる多くの支援を受けたのは記憶に新しい。現在このような国々が災害で傷つき苦しんでいるのを知りながら、われわれが協力、援助の手を差し伸べないとするれば、人道国際社会の一員として恥ずべきことではないか。

最近の日本人は「物」には恵まれ満たされている半面、「心」はますます貧しく、他人の痛みを知らない人々が増えたといわれる。悲しむべき現実だ。自らのことだけでなく、意識的に開発途上国の厳しい状況に関心を寄せ、相応の支援、協力をする姿勢が望まれる。

だが、支援活動するすべを知らない人々が多いのではない。小中学校生は学校を介してボランティア活動を、主婦は家庭や地域で、また各企業や団体で、定年を迎えたシニア世代はその特技を生かした活動の場は限りなくあるのである。

AMDA沖縄として、

途上国の惨状 常に意識して



べないとするれば、人道国際社会の一員として恥ずべきことではないか。

最近の日本人は「物」には恵まれ満たされている半面、「心」はますます貧しく、他人の痛みを知らない人々が増えたといわれる。悲しむべき現実だ。自らのことだけでなく、意識的に開発途上国の厳しい状況に関心を寄せ、相応の支援、協力をする姿勢が望まれる。

だが、支援活動するすべを知らない人々が多いのではない。小中学校生は学校を介してボランティア活動を、主婦は家庭や地域で、また各企業や団体で、定年を迎えたシニア世代はその特技を生かした活動の場は限りなくあるのである。

AMDA沖縄として、

インドネシアのスマトラ沖地震で大きな被害を受けたアチェ州2005年1月

(AMDA提供)

この連載は毎月第四日曜日に掲載します。

AMDA(特定非営利活動法人アムダ) 沖縄支部長・沖縄セントラル病院長

次の要望がかなえられようと考えている。まず、外国への緊急支援体制として、空港に薬品や毛布などの「備蓄基地」を設置できないか。次に、県内の大学で、外国でのボランティア活動のため、コーディネーター養成の講座を開設できないかなどだ。

長い年月の間に培われてきた沖縄の「ユイマー」精神や「イチャリパチョーデー」に象徴される隣人愛を最大限に生かすことで、沖縄発の素晴らしい国際貢献が可能になると信ずる。共に汗を流し、世界中の病める人々のため、私たちAMDA沖縄は、これからも微力を尽くしたい。